

実践報告

博士課程学生のグローバル人材育成にもたらす国際学会発表体験の効果

——事前事後のプログラムの重要性と合わせて考察する

寺澤 ますみ*

*名古屋大学博士課程教育推進機構

Enhancing Global Education through Graduate Students' Experiences of Presenting at International Conferences: With Consideration of the Importance of Pre- and Post-Program Activities

Masumi Terasawa*

* Doctoral Education Consortium, Nagoya University

Presenting research at international conferences at an early stage is crucial for young researchers, not only for enhancing research competence but also for fostering global talent. An analysis of reports submitted by doctoral students after their participation in international conferences revealed that such experiences contribute to the development of international perspectives and to building career paths for global engagement. Importantly, the act of presenting itself creates opportunities to attract the interest of other researchers, facilitating smoother academic communication and collaboration. By presenting their own strengths in research, students are often able to overcome a lack of confidence in English through passion and determination to share their work. Moreover, interacting with researchers from diverse academic and cultural backgrounds enables students to broaden their perspectives, adopt more multifaceted ways of thinking, and expand their personal values. To maximize these benefits, universities should provide continuous support before and after conference participation, including programs that enhance motivation to communicate in the global stage and interest to acquire various points of view, presentation skills, and English proficiency. It is also essential that national and institutional policies ensure that motivated students are not discouraged from pursuing international opportunities due to financial barriers or limited confidence in their language abilities.

Keywords : Global Education for Young Researchers, Doctoral Students, Presentation at International Conferences, Global Programs at Campus, Support for Global Education

キーワード : 若手研究者のグローバル教育, 博士課程学生, 国際学会発表, 大学内でのグローバル教育, グローバル教育支援

* 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町 名古屋大学博士課程教育推進機構

Correspondence concerning this article should be sent to Terasawa Masumi, Doctoral Education Consortium Nagoya University, Furocho Chikusa-ku, Nagoya-shi, Aichi, 464-8601, JAPAN
Email: terasawa.masumi.y6@f.mail.nagoya-u.ac.jp

1. はじめに

名古屋大学は、文科省による博士後期課程学生の支援事業である、次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）の採択を受け、現在約 700 名の博士後期課程学生の支援を行っている。SPRING は「博士後期課程学生による挑戦的・融合的な研究を支援し、優秀な博士人材が様々なキャリアで活躍できるように研究力向上や研究者の能力開発を促す事業である。」（科学技術振興機構、2021）

筆者は本事業の運営に 2022 年度より携わっており、主に博士後期課程学生のトランスファラブルスキル及びキャリアパス開発に向けた能力形成を重視してきた。その中でも、自身が 15 年以上日本の若者のグローバル教育の実務に携わってきた経験から、博士後期課程学生のグローバル人材育成に高い関心を抱いている。こうした取り組みの一環として、学生に積極的に海外の国際学会での発表を始めとした研究活動を奨励している。国際学会発表活動の帰国後の調査より、本活動が研究力の向上のみでなく、博士後期課程学生のグローバル人材育成に一定の効果をもたらすことが明らかになった。また、事前、事後に国内におけるプログラムを充実させることにより、国際学会発表体験の効果をさらに高めることができることも明らかにする。

なお、用語の使い方として、「博士課程学生」には「博士前期課程学生（修士課程学生）」を含めている。自身の調査は「博士後期課程学生」が対象となるが、研究に携わり、国際学会発表などの海外における研究活動の機会を持つ博士前期課程学生も含めたグローバル人材育成を論じる際は、本論文のタイトル含め、「博士課程学生」と表記した。

2. 政策的な観点からの高等教育機関におけるグローバル人材育成の重要性

まずは、政策的な観点について述べたい。文部科学省の審議会資料では、「世界トップレベルの研究者の養成を目指して、世界レベルの研究を推進していく上では、海外における研究経験は極めて重要であり、優れた研究者養成の観点から、トップ層の若手研究者である特別研究員の海外における研究活動を積極的に推進する必要がある。」としている。（文部科学省、2022）また、「産学におけるグローバル人材の育成のための戦略」（産学連携によるグローバル人材推進会議、2011）においても、「日本人学生が海外における留学等の海外経験等を通じてその見識を高め、世界で通用する人材として成長するための環境整備を目指す。」としている。国の政策として、海外研究活動の重要性を認識し、

若手研究者が積極的に海外研究活動を行うことを通し、グローバルに通用する人材の育成を推進していることが分かる。

3. 海外学会発表のグローバル教育への影響

3.1. 博士課程学生におけるグローバル教育の必要性

博士課程教育の重要な目的の一つは、学生を高度な専門性を備えた研究者へと育成するだけでなく、国際社会で活躍できるグローバル人材として成長させることである。「研究者や技術者、科学者としてグローバルに活躍するには、高い専門性に加え、コミュニケーション力、多角的に物事を捉えることの出来る広い視野、異なる文化への理解、相互の信頼関係を築いてゆくネットワーク力などを総合的に身に付けなければならない。」(中橋 2015)

筆者は過去3年間に渡り、海外研究活動にあたって博士後期課程の学生が記述した海外研究活動の目的(特に自身のキャリアパスへの影響と国際性の涵養の観点)及び帰国後の報告書を分析してきた。この過程で、海外研究活動の大半を占める国際学会での発表経験は、研究力の向上やネットワーク形成に資するのみでなく、中橋があげている「コミュニケーション力、多角的に物事を捉えることの出来る広い視野、異なる文化への理解、相互の信頼関係」などグローバル人材として必要な要件を身に付ける上でも大いに役に立つ経験となることを確信した。これらにつき、学生の報告書の分析等をあげながら明らかにする。

3.2. 国際学会発表経験のもたらす効果についての分析結果

国際学会発表が、グローバル人材としての素養を身に付けることに影響を与えたのかどうかを、実際に国際学会発表を経験した学生の帰国後の報告レポートを分析し明らかにする。本分析は、名古屋大学で筆者が関わる SPRING の一環としておこなっている海外渡航費支援の援助を受け、2024年度国際学会において口頭発表またはポスター発表を行った80名の博士後期課程学生による自身の目的の達成度及び自身の成長や学びについての報告に基づく。

海外渡航費支援は、国際学会での口頭またはポスター発表等海外での研究活動にチャレンジしたいと思う学生が申請をし、申請が通った場合にすでに配分している研究費とは別に、上限を設けた実費を支援する。申請段階で重要なのは、研究成果のみでなく、必ず自身の「国際性の涵養」及び「グローバル人材としてのキャリアパス構築」という観点からこの機会をどう生かしたいかを具体的に論述することである。したがって、国際学会での発表を終え帰国した

80名の、「自身の目標は達成できたか」という問いへの評価には、自身の国際性の涵養等に役立ったかという指標も含まれる。

学生が渡航前に設定した目標の主なものは下記の4点に集約できる。

1. 研究成果を国際会議の場で報告し、自身の国際的研究力および発信力を高める。
2. 他の研究者とのディスカッションを通して研究ネットワークを構築する。
3. 英語を用いたコミュニケーション力を向上させる。
4. グローバルに通用するキャリアパス構築に向けた一步を踏み出す。

達成度に対する自己評価は以下となる。

表1 国際学会発表を通じた目標達成度

	人	%
十分達成できた	50	62
達成できた	26	33
ある程度達成できた	3	4
あまり達成できなかった	1	1
達成できなかった	0	0
計	80	100

表1の結果を見ると、95%の学生が「十分達成できた」「達成できた」と回答しており、研究面での成果に加え、国際性の涵養やグローバル人材としてのキャリアパス構築等の観点からも成果を上げることが出来たことが分かる。

国際学会発表を終えた80名が報告した、自身の気づきや学びについては、下記の5つの項目に整理できる。

(1) 発表準備と自己成長

多くの学生が、国際学会に向けた十分な準備が自信につながったと述べている。ある学生は「発表準備を通して、効果的なプレゼンテーションの方法や伝わる表現について試行錯誤できた。」と語り、事前練習が英語表現や構成力の向上に資したことを強調した。また、異分野の聴衆に向けて専門用語を避け、例えを用いることで「英語でわかりやすく伝える力を磨くことができた」と述べた学生もいた。

(2) 言語運用の工夫と課題

発表の場では、言語的な不安を超えて内容と熱意を伝えることの重要性が強調された。「完璧な英語を話すことは重要ではなく、単語や短いフレーズでも内容が伝わる」「デモ映像や身振りを併用することで相手の理解を助けられる」との回答があり、伝達戦略の多様性が浮き彫りとなった。一方で、「質疑応答では質問の理解が不十分で適切に回答できず無力感を覚えた」との反省も複数見られ、特にリスニングや即応力に課題を感じる学生が少なくなかった。

(3) 国際学会を通じた気づき

発表経験からは、「研究内容への誇りと情熱をもって伝えることの大切さ」「声量や話す速度の工夫によって伝達効果が高まる」といった気づきが報告された。さらに、国際学会は英語力だけでなく研究姿勢の変化を促す場でもあり、「英語が多少拙くとも、研究の中身と熱意が伝わることを学んだ」という回答はその象徴的な例である。

(4) 挑戦を通じたモチベーションの向上

学生の多くは、困難や失敗を経験したことを契機に、今後の学習意欲を高めていた。例えば「英語での議論が十分にできなかった悔しさから、帰国後すぐに英会話学校に申し込んだ」学生や、「今回の失敗を糧に英語力を磨く決意を固めた」と語る学生もいた。こうした経験は、学会発表が単なる成果発表ではなく、今後の英語力向上への持続的なモチベーションにつながることを示している。

(5) 国際的ネットワークと視野の拡大

口頭発表を行った学生の中には、「多様な分野の研究者と先進的なディスカッションを行うことができた」と報告する者もあり、国際学会が研究の枠を超えた学際的交流の契機となることが確認できた。また「異なる文化背景を持つ研究者との交流を通じて柔軟な考え方を養った」とのコメントからは、学会参加が研究力に加え国際的な視点を育成する役割を果たすことがうかがえる。

もちろん、本来の目的である自身の研究を広く伝え、関心を持ってもらえたことで自身の研究に自信がもてた、あるいは将来的な共同研究パートナーを得られたといった、研究本来の内容に関わる学びも多々あるが、ここではグローバル教育という視点にフォーカスすることより、上記の5つの項目に整理した。

3. 3. 国際学会発表体験のグローバル教育への影響についての考察

以上の結果を踏まえ、国際学会発表体験のグローバル教育への影響について考察する。国際学会においては、休憩時間やレセプション時、時には必ずしも研究とは直接関係ない話題を通して、様々な研究者とネットワークを構築でき

るかが重要である。ここで力を発揮するのは、必ずしも英語力だけではない自身の人間的な魅力～例えば専門分野以外に他を引き付ける話題提供ができるか等である。また相手のことに興味関心を持ち、多様な考えを受け入れようとする姿勢も重要となる。

初めて国際学会に参加した学生の中には、自身の英語力の低さを痛感し落ち込む場合もある。ただし、その経験を活かし、次はもっとうまくやろうと帰国後英語をしっかりと学ぶなど次回に向けたモチベーションがはぐくまれるケースも見られた。ここで重要なことは、そのモチベーションを失わないうちに、次の一手を打つことである。国内において、日常的に英語を使い、異分野交流等ができる場面を大学で頻繁に提供する環境作りが重要となってくるが、具体的には後の章で述べる。

国際学会発表において、参加者が専門性を持つ研究者であることは言うまでもない。専門性の部分での優位性があれば語学力が多少不安でも、コミュニケーションの妨げとならず積極的なネットワーク構築の助けとなったと報告した学生もいる。参加者の感想の中で、「必ずしも流暢な英語を使う必要は無い、分かりやすい英語を使う、相手にいかに伝わるかを意識することが大切である。」という感想があったが、まさにそのような気づきを体験の中から得ることができるのも国際学会の魅力の一つとなる。英語が通じない場合に、手振り身振りなども交えてなんとか通じさせようとする努力、問題解決能力あるいは突破力と置き換えられると思うが、実際に困難に直面して初めて自身の潜在能力が引き出されるのである。

ネットワーク構築においては、英語にそれほど自信が無くても自分からどんどん話しかけに行けることに越したことはない。ただし多くの日本人はこのような場面ではシャイであり、日本人同士が固まって話すことになりかねない。しかしもし国際学会において、自身が発表者であったらどうか。もちろん研究内容のクオリティにはよるが、発表することで研究テーマに関心を持った研究者が話しかけに来てくれる場合が想定され、単に一聴衆として学会に参加することに比べ学術交流機会が増大するのである。浦田・小島(2016)は、「日本の学校の隠れたカリキュラム」をグローバル人材への他の視点において指摘しているが、この日本人独特の教育環境に関する考察は興味深い。浦田・小島(2016)は「伝統的な日本の学校で教育を受けてくると、自分の意見を言うことが困難になってくる」と指摘する。国際学会に単に参加するだけでは、おそらく日本人は自分から積極的に話かけたり、意見を求められて発言することを困難に感じるかもしれない。ただし自身が発表者であれば周りが話しかけに来てくれ、

内容も自身の強みである専門分野のことであるため、シャイな性格であっても、あるいは英語力が十分ではなくても、積極的にコミュニケーションを図れる可能性が増す。以上単なるオーディエンスではなく、国際学会での発表者としての経験が英語コミュニケーション力の向上及び、多様な価値観等を持つグローバル人材育成にもたらすポジティブな影響について考察した。国際学会発表体験がグローバル人材育成に及ぼす影響について図1に整理する。

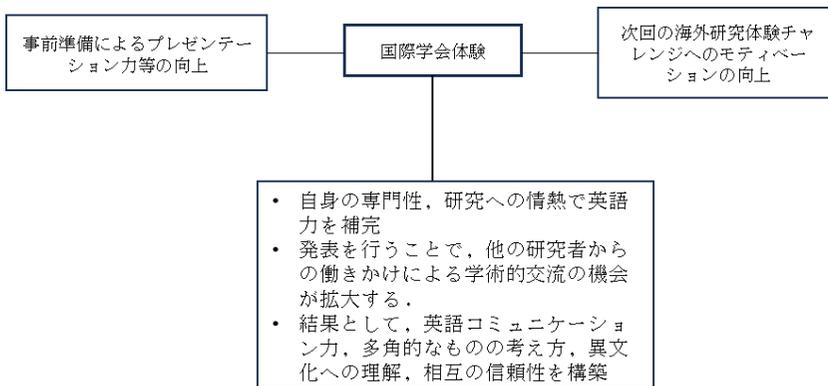


図1 国際学会発表体験がグローバル人材育成に及ぼす影響

4. 海外活動経験の効果を高める事前と事後の国内での取り組み

4.1. 事前事後プログラムの重要性

国際学会発表者の帰国後の報告から、海外での学会発表に向けての準備がいかに重要であるかが分かった。一方で通常、国際学会は3日から長くても5日程度、そのうち自身が発表する日は1日となる場合が多い。先に述べた様々な気付きや学びを体験した場合でも、帰国後日常の研究に忙殺され過ぎうちに、再び海外へというモチベーションが失われるということは十分あり得る。そのような状況を回避するため、以下では、事前学習及び事後のフォローアップとして国内で取り組めることについて、事例をもとに提案したい。西村・趙(2022)による「内なる国際化」の概念は、海外での体験とその前後の国内でのプログラムを体系化することのグローバル教育への意義を考察する上で非常に有益である。

西村らが指摘している、「国内にあって主体的に国籍や文化的背景の違う他者に関り、多様性を尊重・受容し、互いが持つ能力を対等に発揮し合って地域、企業、生活圏を共有し共に生きていくスキルを身に付けるための「内なる国際化」(西村・趙, 2022)は、海外活動の効果を高めるための事前・事後の国内

での取り組みとしては極めて有効である。

博士課程学生が国際学会で研究発表をすることを「外なる国際化」（西村・趙，2022），その事前準備や帰国後のモチベーション維持の国内における教育を「内なる国際化」と捉え，グローバル人材育成において両方の教育を長期的スパンで体系的に行うことは極めて重要である。

4. 2. 国際学会発表の事前・事後研修事例

国際学会発表の事前準備及び帰国後のモチベーション維持に効果的な教育プログラムとして、2022年度より2-3か月に1回の頻度で英語で行っている融合研究交流会がある。名古屋大学には13の研究科があるが、本プログラムはすべての研究科及び国籍の博士後期課程の学生を対象として希望者を募集して行う。毎回出席者は20名程度で、そのうち3名程度は、自身の研究の概要、社会的な意義、自身の研究へのモチベーションについて英語でプレゼンテーションを行う。その後小グループに分かれ、お互いが自身の研究の紹介をし、質問をしよう。専門分野が違うもの同士がこのような交流会に参加することには以下のような意義がある。

- 自身の研究をわかりやすく人に伝える力がつく。
- 違う専門分野の話聞くことで、多角的なものの考え方が身につく。
- 英語によるプレゼンテーション力、コミュニケーション力の上達
- 日本人と留学生が一緒におこなうことで、お互いの文化への理解関心が深まる。
- 将来的な国際学会参加へのモチベーションの向上

以下は2024年10月から2025年7月にかけて計4回行った英語での融合研究交流会の延べ70名の参加者の参加後のアンケート結果である。

表2 本交流会の満足度

	人	%
大変満足	43	61
満足	27	39
あまり満足していない	0	0
不満足	0	0
計	70	100

表3 次回以降の参加への意欲

	人	%
また参加したい	70	100
そうは思わない	0	0
計	70	100

表2, 表3 が示すように, アンケートでは 100%の学生が「大変満足」「満足」と回答, 同じく 100%の学生が次回も同様な交流会に参加したいと答えた. 実際各回の交流会のうち 30%程度はリピーターである. アンケートコメントからは, プログラム参加が学生に対して主に二つの効果をもたらしていることが明らかになった.

第一に, 海外学会発表に向けた準備としての効果である. 例えば,

- 将来の学会発表に備えて, 研究発表準備を行うことが出来た. (I enhanced my practice at presenting my work during future conferences.)
- 人前で自身の研究について話す自身が持てた. (It gave me a good confidence to talk about my research in front of students.)

といった意見からは, 学会発表を想定した実践的な練習の場として交流会が機能し, 発表力や自信の向上につながっていることが示される.

また

- 他の学生の発表内容を完全に理解できたわけではないが, 彼らの発表から刺激を得ることが出来た. また, 自身の研究をわかりやすく伝える訓練となった. (Although it was hard to fully understand other students' research, hearing about their work was inspiring. I also explained my research in a simple way, which they appreciated.)
- 自身の専門とは違う分野の人々から学ぶと同時に, 自身の研究を専門外の人に伝える訓練になった. (I met with people from different area and learn knowledge from their fields. I also improved my skill to introduce my research to people know nothing about it.)

といったコメントからは, 専門外の参加者に対して研究を分かりやすく説明するスキルが培われていること, また異なる専門分野の研究に対する興味関心を喚起することがわかる. これは多様な聴衆を前提とする国際学会において重要な能力である.

第二に, 帰国後のモチベーション維持に寄与する効果が見られた. 例えば,

- 他の研究者の話に刺激を与えられた。（“Hearing about their work was inspiring.”）
- こうした交流会は、自身の視野を広くしグローバルに考えることに役立つ（Such kind of workshops can really help to cross boundaries and think globally.）

といった意見は、異分野の研究者との出会いが新たな視点や刺激をもたらし、帰国後の研究意欲の持続や、将来的な再度の海外体験へのモチベーションに繋がることを示唆している。

さらに、

- グループディスカッションはネットワークを構築したり、将来的な共同研究のために大変重要だった。（Group discussion was very important to build network and find possible future research collaboration.）
- 将来マネジメントに携わりたいので、こういった機会は歓迎する。（I want to shift to management in future, so I'm always appreciative of this kind of events.）

といったコメントからは、本プログラムが人的ネットワークの形成や将来のキャリア意識の醸成につながっていることが確認できる。これを契機にまた海外に出ていき、より広いネットワーク作りへの意欲が増すものと思われる。

以上の結果から、本プログラムは海外学会発表に必要とされるプレゼンテーション能力の向上、自信の獲得、専門外への説明力の習得といった即効的な効果をもたらすとともに、異分野交流や国際的視野の拡大、研究ネットワークの構築を体験した帰国後のモチベーション維持、2回目、3日目の海外研究活動への意欲喚起にも寄与していると考えられる。これらの効果は、先行研究が指摘するグローバル人材育成の要件（例：コミュニケーション力、多角的に物事を捉えることの出来る広い視野、異なる文化への理解、相互の信頼関係を築いてゆくネットワーク力（中橋，2015））とも整合的である。したがって、本プログラムは単なる発表練習や英語ディスカッション機会の提供にとどまらず、博士課程学生の長期的なグローバルキャリア形成を支える教育的意義を有することが確認できた。



写真1 融合研究交流会の様子

5. 国際学会発表にチャレンジできる環境整備の重要性

以上みてきたように、博士課程学生が将来的なグローバルキャリア形成において国際学会発表にチャレンジすることは極めて重要である。そのための環境を大学内でどう整えていけるであろうか。研究力そのものをあげることはもちろん個人の努力や指導教員の尽力に関わるが、外部支援として大学が組織として行えることは下記の2点となる。

(1) 経済的なサポート

SPRINGの支援を受け、対象の博士後期課程学生には一定の研究費を配分している。また、国際性の涵養及びグローバル人材としてのキャリアパス構築を奨励するという観点より、配分された研究費に加え、相当額の海外渡航に関わる支援金を配分している。毎年応募者は増えており、2025年度は100名を優に超える学生が国際学会の発表等にチャレンジしてきている。特に欧米の学会への渡航は、経済的にかなりの負担を強いるため、経済的なサポートは欠かせない。SPRINGに採択された学生はこのように恵まれた環境にあるといえるが、こういった事業の恩恵を受けられない、意欲ある博士課程学生の経済的支援をどうするかは課題として残る。

(2) モティベーションの醸成

先にあげた「内なる国際化」(西村・趙, 2022)を促すための英語による融合研究会を通し、学生が英語コミュニケーションに自信を持ち、国際学会参加のモチベーションにつながる機会となることは述べた。それ以外にも、英語教授法資格を持つ外国人講師による英語のディスカッション研修を通年で行っている。また、カジュアルな雰囲気の中で、英語に堪能な留学生等がメンターとして入り、英語に苦手意識を持つ日本人を主な対象とした英語コミュニケーション力向上を目指すEnglish Speaking Salonを定期的で開催し、学生の英語へ

の苦手意識の払拭に努めている。

さらに、実際に海外研究活動を行った先輩学生の話聞く機会を報告会として設け、国際学会発表等に向けどのように準備したか、お金の工面はどうしたかという準備段階から、現地での有益な活動の報告を聞いたり、質問をしたりする機会を通し、海外の研究活動にチャレンジしようとする学生が増えている。このようなプログラムも海外にチャレンジしようとする学生のモチベーション向上に大変有効である。

日本の若者のうち向き志向が言われることが多い。しかし「グローバル人材の育成を妨げる要因が、若者の内向き志向にあるという短絡的な指摘は適切ではない。海外留学を目指す若者は、彼らの状況の許す範囲で海外経験を積む努力をしている。」(西村・趙, 2022) という指摘に、筆者も同意見である。博士課程の学生において積極的に海外にチャレンジしようという意欲満ち溢れる若者は一定数いることは事実である。そうした若者が経済的理由あるいはその他の阻害要因で海外に出ることをあきらめないで済むような体制作りは、やみくもに全員に海外経験を奨励する施策より優先的に行われるべきと考える。

6. まとめ

国際学会発表は博士課程学生にとって単なる研究成果の発表にとどまらず、英語コミュニケーション力、国際的発信力、異文化対応力、ネットワーク能力といったグローバル人材に必須の能力を総合的に涵養する教育的機会であることが証明された。また、学会発表に向けての準備、帰国後のモチベーション維持のための教育プログラムを、大学内で整備することで、国際学会発表の効果をより高めることも明らかになった。今後は、学生の博士課程時代の活動及び学位取得後のキャリアパスを長期的スパンで調査し、グローバルキャリアの構築について可視化できる評価指標を検討し、国際学会発表経験がグローバル人材育成に与える影響につき、評価指標に基づいた定量的な分析を加えた証明を試みたい。

参考文献

科学技術振興機構(2021)。「次世代研究者挑戦的研究プログラム」。

<https://www.jst.go.jp/jisedai/spring/>

文部科学省 (2022)。「科学技術・学術審議会学術分科会研究費部会 (第 11 期第 5 回) 議事次第」。

https://www.mext.go.jp/content/20220513-gakjokik-000022527_01.pdf?utm_source=chatgpt.com

産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011）。「産学連携におけるグローバル人材の育成のための戦略」。

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf

中橋真穂（2015）。「理工系大学院制のグローバル人材育成に向けた短期海外研修—PAC 分析による参加者の意識変容に着目して—」、『グローバル人材育成教育研究』, 第2巻, 第2号, 46–57.

浦田葉子・小島由美（2016）。「『発表』が促すグローバル人材育成—外国語発表化がつつかったもの—」、『地域社会デザイン研究』, 第4号, 13–26.

西村政子・趙彩尹（2022）。「日本の大学におけるグローバル人材育成の現状と課題—外なる国際化及び内なる国際化を中心—」、『教育経済学研究』, Vol.1.

博士課程学生のグローバル人材育成にもたらす国際学会発表体験の効果